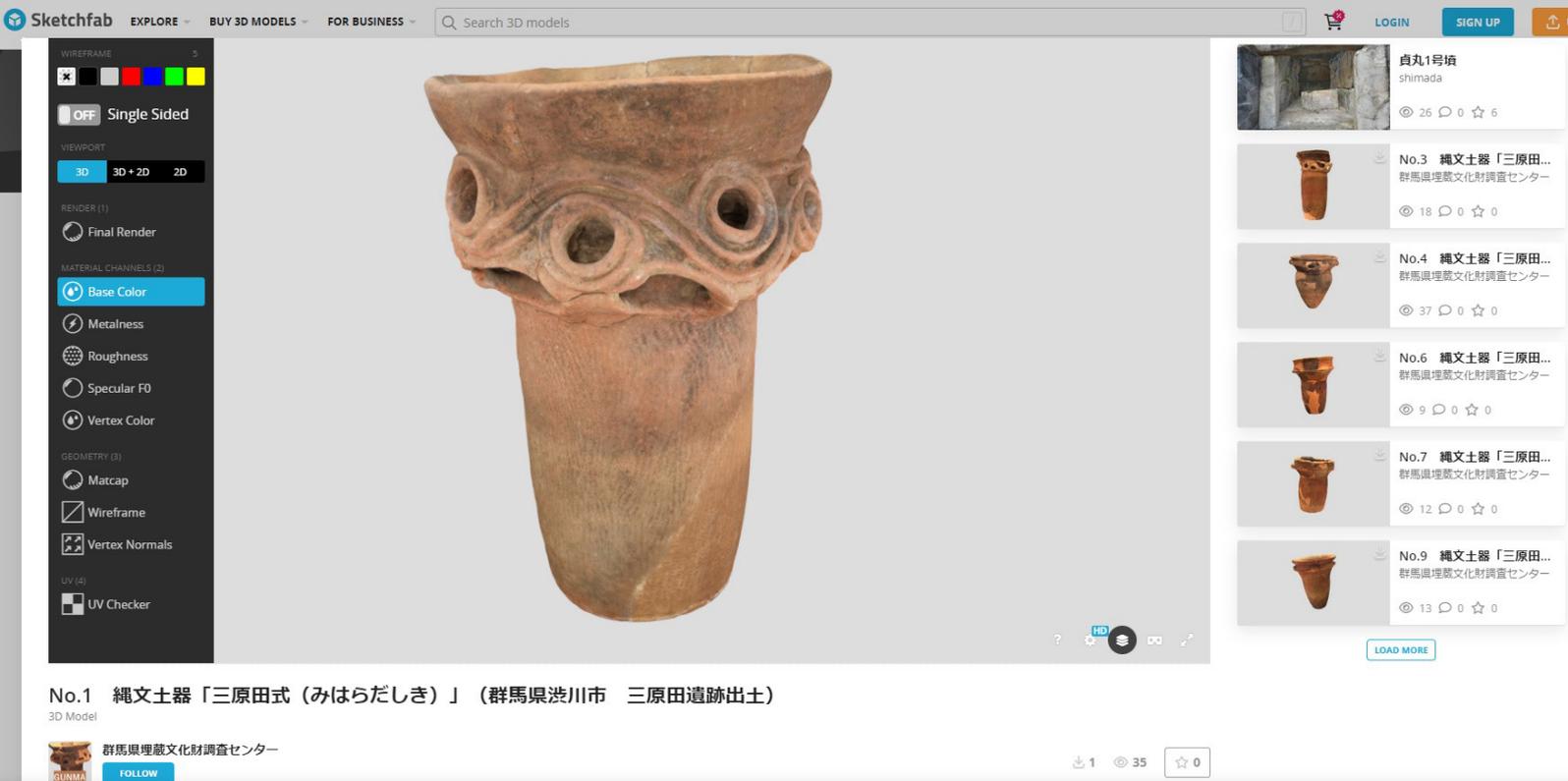


# 埋文群馬

MAIBUNGUNMA



Web サイト「SKetchfab」に掲載された縄文土器（群馬県渋川市三原田遺跡出土）の3Dモデル

## 埋文群馬No.68 目次

● my message		● 遺跡フロントラインⅢ	
多様化する情報発信	木津博明…… 2	● 本郷鶴楽遺跡出土の小神像	
		—平安時代後期の人々の祈り—	松村和男…… 7
● 埋文ライブラリー		● 遺跡フロントラインⅣ	
ここクリック！事業団ホームページ探検		バーチャルを通じて文化財に出会う時代がやってくる	
—遺跡や遺物の知識がいっぱい—	板垣詩乃…… 3	—3Dアーカイブ事業について—	板垣泰之…… 9
● 遺跡フロントラインⅠ		● 講演ドキュメントⅠ 令和4年度ぐんま考古学講座	
樋越薬師遺跡		村上恭通先生「鉄と馬が共存する古代社会の鉄器生産	
—噴火と利根川の氾濫で埋もれた畑と玉村町初の柄鏡形敷石建物—		—モンゴル・グング遺跡と群馬・金井下新田遺跡を中心に—	
	迫田睦生…… 4		飯塚 聡……10
● 遺跡フロントラインⅡ		● 講演ドキュメントⅡ 令和4年度ぐんま遺跡報告会	
小泉天神西遺跡		発表要旨	本田寛之……11
—山間に広がる古代集落の様相—	田村 真…… 6		

掲示板・表紙の写真解説





## 多様化する情報発信

新型コロナウイルス感染症が世界的に流行したこの4年間。人と人との接触をはじめ、社会生活が大きく制限されるなかで、展示会や講演会の動画配信を試みたことは、私たちにとって情報発信への挑戦でした。

そして、さらなるチャレンジとして、遺物を3Dモデル化する新事業にも取り組みました。さまざまな試行錯誤のなかでできあがった群馬県を代表する30点の縄文土器の3Dモデルは、インターネットで世界中の人がご覧いただけます。

3Dモデルの良さは、インターネット環境があればいつでもどこでも見ることができることと、展示室では見えにくい部分まで見られることです。土器の底や内面のようすまで自由に鑑賞すると、新たな発見もあるはずです。

新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行し、日常生活が戻り人と人との交流ができる安心感は、何にも代えがたいものです。テレビ通話が普及しても、親しい人と対面で交流できた瞬間に心が満たされ、喜びに包まれるのではないのでしょうか。これは、リアルな時間と空間の共有が、人間にとって大切なエネルギーになるからです。

遺物を実際に見た時の心に響く感覚も同じことで、土器を作り、使っていた古代人と時間や空間を共有できる展示室は、古代人と直接に会えるタイムトンネルなのです。

情報発信が多様化する世の中で、「過去、現在、未来をつなぐ埋蔵文化財」を世界に発信し、多くの方々に体感していただけるよう、これからもチャレンジしていこうと考えています。

木津博明

# 埋文ライブラリー

ここをクリック！  
事業団ホームページ探検

遺跡や遺物の  
知識がいっぱい

板垣詩乃

HP  
トップページ



## ① 事業団のHP ようこそ！

「群馬県埋蔵文化財調査事業団」や「発掘情報館」と検索をすると「公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団」のHPがヒットします。トップページで皆さんをお迎えするのは、群馬県渋川市の有馬遺跡から出土した弥生時代の人形土器です。

HPには、県内各地の遺跡や事業団のイベント情報が盛りだくさんです。一緒に探検しましょう。

## ② 体験学習やイベント情報を知りたい

発掘情報館のバナーでは、事業団で開催する展示やイベント、刊行物に関するお知らせについてチェックできるほか、体験学習、出前授業、まいぶん出前講座などの案内をご覧いただけます。また、学校及び教育関係者向けの埋蔵文化財情報誌『遺跡に学ぶ』もPDFで公開しています。

発掘情報館のバナーを選択する



刊行物案内のバナーを選択する



## ③ 遺跡や遺物についての情報を知りたい

刊行物案内のバナーでは、一般向けの埋蔵文化財情報誌『埋文群馬』や『年報』をPDFで公開しています。

## ④ NEW！調査研究員イチ推しの展示物を知りたい

トップページの「調査研究員のイチ推し」は今年度開設したコーナーです。実物は平日のみ開室している収蔵展示室に展示してありますのでぜひご覧ください。

調査研究員のイチ推しを開く



## ひごしやくし 樋越薬師遺跡

(佐波郡玉村町樋越)

えかがみがたしきいし

—噴火と利根川の氾濫で埋もれた畑と玉村町初の柄鏡形敷石建物—

迫田睦生

### 1 令和4年度の発掘調査

樋越薬師遺跡は一級河川利根川（伊勢崎・玉村工区）河川改修に伴い発掘調査が行われました。遺跡は利根川左岸に位置し、北には藤川が流れています。令和4年度調査区の東側は令和3年度に当事業団が発掘調査を行い、古墳時代から古代にかけての竪穴建物や、中・近世の畑などが発掘されています。

### 2 噴火で埋まった畑

天明3（1783）年に噴火した浅間山の軽石（As-A）と天明泥流によって埋まった近世の畑・溝・道を発掘しました。利根川の近くで畑が営まれていたことがよくわかります。

畑の土は非常に細かいシルト質で、大変水はけのよい土壌でした。畑を断ち割って調査すると、天明3年に埋まった畑よりも古い畑が確認できました。利根川が氾濫するたびに畑を作り直していた様子が見えます。



(写真1) 近世の畑

土手によって囲われている畑もありました。土手は利根川の氾濫から畑を守るために作られたと思われます。土手の一部は川原石が積まれ、補強がされていました。

また、調査を進めると天仁元（1108）年に噴火した浅間山の軽石（As-B）の直下でも耕作痕が確認されました。連綿と人々がこの土地で生活していたことがうかがえます。



(写真2) 近世の土手

### 3 焼け落ちた竪穴建物

7世紀ごろと想定される焼失竪穴建物を発掘しました。焼失の理由としては大きく分けて二つ考えられます。一つ目は竪穴建物が廃棄される段階で意図的に火をつける場合です。もう一つは竪穴建物を使用している段階で火災にあって燃えてしまった場合です。

今回調査を行った焼失竪穴建物では床面と壁面に炭化物が張り付いた状態で検出されました。この炭化物は、壁材や屋根材が焼け落ちたものと考えられます。

カマドは東壁、中央付近に設置されており、意図的に壊されていました。炭化物の下からは遺物があまり検出されませんでした。これらのことから火災にあって燃えてしまったのではなく、カマドを壊し、家財道具を撤去した後、竪穴建物を廃棄するときに意図的に燃やしたと想定できます。



(写真3) 焼失竪穴建物の炭化物検出状況

#### 4 古墳時代前期の竪穴建物

古墳時代前期の竪穴建物を4棟発掘しました。この中には床面が複数確認できる竪穴建物があり、同じ場所に竪穴建物を作り直していた様子がうかがえます。



(写真4) 古墳時代前期の竪穴建物

このうちの1棟からはガラス小玉が1点出土しました。ガラス小玉は通常、竪穴建物からは出土せず、1点ではなく複数で出土します。そのためどうしてこの場所に残されたのか、興味深いです。



(写真5) ガラス小玉出土状況

#### 5 玉村町初の縄文時代の柄鏡形敷石建物

平面形が柄鏡の形をしており、床面に石が敷かれた柄鏡形敷石建物を検出しました。柄鏡形敷石建物は玉村町内では初めての発見です。柄の部分には重点的に石が敷かれていました。敷かれていた石には川原石の他にも、凹石や石皿などの石器が転用されていました。建物の中央には石を炉の周りに巡らせた“石囲炉”が検出されました。炉の内部には土器があり、これは“炉体土器”（炉に据えられた土器）と言われています。柄の部分との境には石囲施設があり、その内部には縄文土器が埋設されていました。この埋設された土器を

“埋甕”<sup>うめがめ</sup>と呼びますが、通常は出入り口付近から検出されることが多いのです。民俗例などから乳幼児を埋葬した、あるいは胎盤を収納したと考えられていますが、実際のところはよくわかっていません。



(写真6) 柄鏡形敷石建物



(写真7) 石囲施設

#### 6 おわりに

今年度の調査では縄文時代から近世までの遺構が確認でき、人々が長い間この土地を利用してきたことがわかりました。一方で弥生時代の遺構は検出されていないため、弥生時代の人々がここで生活を営んでいたのかは不明です。

今後も利根川沿いの調査は継続されていくため、この地域の歴史の解明が進むことが期待されます。



## こいずみてんじんにし 小泉天神西遺跡

(吾妻郡東吾妻町)

—山あい広がる古代集落の様相—

田村 真

### 1 令和4年度の発掘調査

小泉天神西遺跡は、吾妻郡東吾妻町小泉に所在し、吾妻川の右岸、標高約380mの榛名山の北麓から延びる斜面の台地上にあります。上信自動車道建設事業に伴い、発掘調査が実施されました。発掘調査では縄文時代から中近世にかけての遺構が見つかり、古くからこの地域を生活の場として利用し、継続的に集落を営んできた人々のことを知る上での貴重な資料となりました。小泉天神西遺跡の古代(奈良・平安)について、特徴ある竪穴建物や出土遺物について紹介します。



(写真1) 奈良・平安時代の竪穴建物全景

### 2 カマド構築材の石

遺跡からは17棟の竪穴建物が見つかりました。これらは8世紀から10世紀にかけてのものです。この集落の竪穴建物のカマドは1棟を除きすべて東側に造られ、構築材として多種多様な礫を使用し、燃焼部から煙道部まで丁寧に造っています。中でも8世紀の8号竪穴建物のカマドは砂岩だけを用いて構築しています(写真2)。他の竪穴建物も砂岩を使用しているものがありますが、砂岩だけで構築しているのはこの1棟だけです。砂岩は他の石に比べ、軽く加工しやすいことから古来より各地で多用されてきました。遺跡北西の吾妻川周辺にも砂岩の産出地があることが地元でも知られており、カマドに使用された砂岩はそこから運んできたものと考えられます。今回調査した範囲

の外にも砂岩で構築されたカマドをもつ竪穴建物が埋もれているかもしれません。



(写真2) 砂岩だけで造られたカマド

### 3 竪穴建物は廃棄場？

いくつかの竪穴建物から、明らかに埋没途中で破棄されたと考えられる、特徴ある遺物が出土しています。1つは8世紀の2号竪穴建物から出土した円面硯えんめんけんと呼ばれるすりです。上面が円形で、下方の脚部には透かし窓があります。2つ目は7～8世紀の12号竪穴建物から出土した須恵器の大甕で、こちらもほぼ1個体分の大甕片数十点が埋没途中で廃棄されており、今後の復元が期待されます。3つ目は鉄滓です。総重量約4kgの鉄滓が廃棄されていました。これらがどこから運ばれ廃棄されたのかはわかりませんが、関連する遺構が近隣の山間のどこかに所在するかもしれません。



(写真3) 廃棄された円面硯の脚部出土状況



### —平安時代後期の人々の祈り—

松村和男

#### 1 本郷鶴楽遺跡の概要

本郷鶴楽遺跡は西毛広域幹線道路（高崎西工区）整備事業に伴い、平成29・30年度に発掘調査を行いました。その結果、縄文時代から中近世までの多くの遺構や遺物が検出されました。中でも平安時代の竪穴建物は10世紀後半から急増し、11世紀前半まで続く特徴がみられました。今回は平安時代の竪穴建物から出土した小神像について紹介します。

#### 2 竪穴建物出土の小神像

神像は神道における神（カミ）をかたどった像です。元々は自然現象や自然にあるものが神であり、山や大木、大岩など自然にあるものに神が宿ると考えられていました。奈良時代以降、神仏の関係は次第に緊密化し、平安時代になると神仏習合、つまり神も仏も本質は同じものという考え方が普及することとなり、9世紀頃仏教の影響を受けた僧形八幡神像のように見た目はお坊さんの神像が作られるようになりました。こうした流れを受けて10世紀から12世紀頃になるとこれまでのものと違った小形の仏像や神像が造られるようになりました。これは前後合わせ型の隙間に溶かした銅を流して造るもので大量需要に合わせた量産品であり、それまでの蟬型で依頼主の注文に合わせて造る1点ものとは趣を異にするものでした。

本郷鶴楽遺跡の小神像は男性の神様の姿をしており、竪穴建物内でうつ伏せの状態で見出されました。銅製で、表面に金メッキなどは確認できませんでした。全体の高さが9.7cm、重量は221.7gと平安時代の県内遺跡出土小神像の中では最も重く、台座を除く本体だけで9.2cmと最も背の高い像でもあります。国分寺中間地域遺跡で出土した31.6gの神像の約7倍の重さで、かなりの大形品です。頭には折り烏帽子状の宝冠を被り、両手は臂を曲げ胸の前で合わせていますが、何も持っていません。左肩から右腰にかけてたすき状の布を掛けています。耳は大きく、眉や目尻は吊り上がり、顔は厳しい表情となっています。肩はわかり肩で、お尻は後ろに突き出していて類例のない姿勢となっています。腰から足下にかけて前掛けが垂れ

下がり、足元は二つに分かれ袴を着けているように見えます。台座は隅丸方形となっています。鑄造されたのは一緒に出土した土器から10世紀後半頃と考えられます。



(写真1) 小神像出土状況



(写真2) 出土小神像展開写真

#### 3 まとめ

本郷鶴楽遺跡の小神像は県内の同時代の出土例の中では大きくて重いものですが、手で握って持ち運びができて、いつでもどこでも祈ることができます。昔の人はこの像に何を願ったのでしょうか。お金持ちになれるように、あるいは極楽浄土への往生などでしょうか。

## バーチャルを通じて文化財に出会う時代がやってくる

### － 3D（三次元）アーカイブ事業について－

板垣泰之

#### 1 3D アーカイブ化事業について

令和4年度から、遺物の3Dアーカイブ化事業を群馬県の委託を受けて実施しています。「収蔵庫で保管しているため見ることができない資料を、様々な人がネット上からアクセスできる」「展示ケースに入っているため動かさない資料の底部を観察できる」「海外からも様々な資料にアクセスできる」など考古資料を3Dモデル化し、インターネットで公開することで、新しい公開・活用ができると期待されます。

今回は3Dモデルの作成をどのように行っているかをご紹介します。



(写真1) バーチャルリアリティで土器(3Dモデル)を持つ疑似体験もできる

#### 2 モデルの選定

令和4年度は、渋川市の三原田遺跡から出土した縄文土器を取り上げました。三原田遺跡から出土した縄文土器には土器の口縁部が水平で、口縁部の周囲に外に飛び出すような形で文様がつけられている群馬の特徴をよく示す土器があります。その形が頭に皿が乗っている姿に見えることから、妖怪の「カッパ」という愛称で研究者から呼ばれることもあります。

#### 3 3Dモデルを作るには

3Dモデルの作成には大きくレーザーで3Dモデルを作成する方法と、写真から3Dモデルを作成する方法の2種類があります。レーザーを使う場合は対象の位置情報がリアルタイムでパソコン上に反映されるた

め、データの取得が速いのが特徴です。また、古墳に生えている樹木や草の影響を受けにくいので古墳などの計測するのに利用されることもあります。

一方、写真を使う方法は、全方位からくまなく撮影した写真を重ねて3Dモデルを作成します。写真で撮影できる範囲であれば、遺跡や考古資料も3Dモデル化をすることができます。しかし、写真に写った通りに3Dモデルが作られるので、古墳の石室など暗い場所では不向きです。

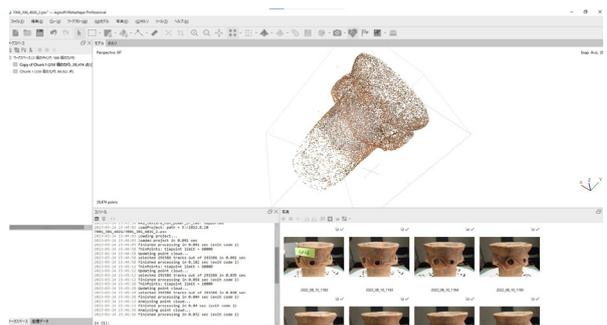
今回は、土器の細かな表面の情報を再現するために、写真による詳細な表現が必要と考えて、写真による3Dモデル化を実施しました。

#### 4 写真を撮影して、3Dモデルを作る

始めに、被写体が少しずつ重なるように撮影をします。今回は、縄文土器1点につき150～300枚程度の写真を撮影しました。この写真を元にヒビ割れや

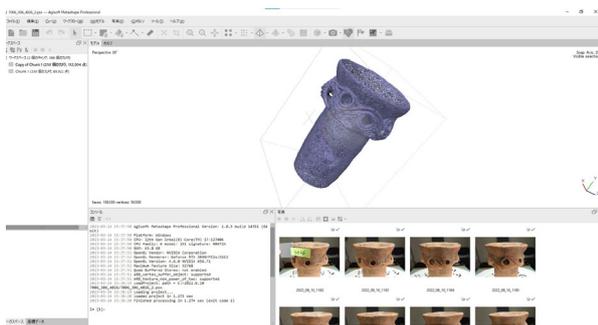


(写真2) 撮影風景



(写真3) 点群データ

突起などの同じ特徴がどこにあるかを3Dモデル作成ソフトが自動的に検出し、組み合わせることで立体構造を点群データという形で構築します。次にその点群データを利用して、点同士を線でつなげることで網目状のデータ（メッシュデータ）を作り、立体化させます。最後に、撮影した写真データの色や質感などのテクスチャ画像を3Dデータに貼り付けて完成させます。点群データの点の数が多いほど詳細なモデルになりますが、データ量が重くなります。



(写真4) メッシュデータ

## 5 3Dデータの公開

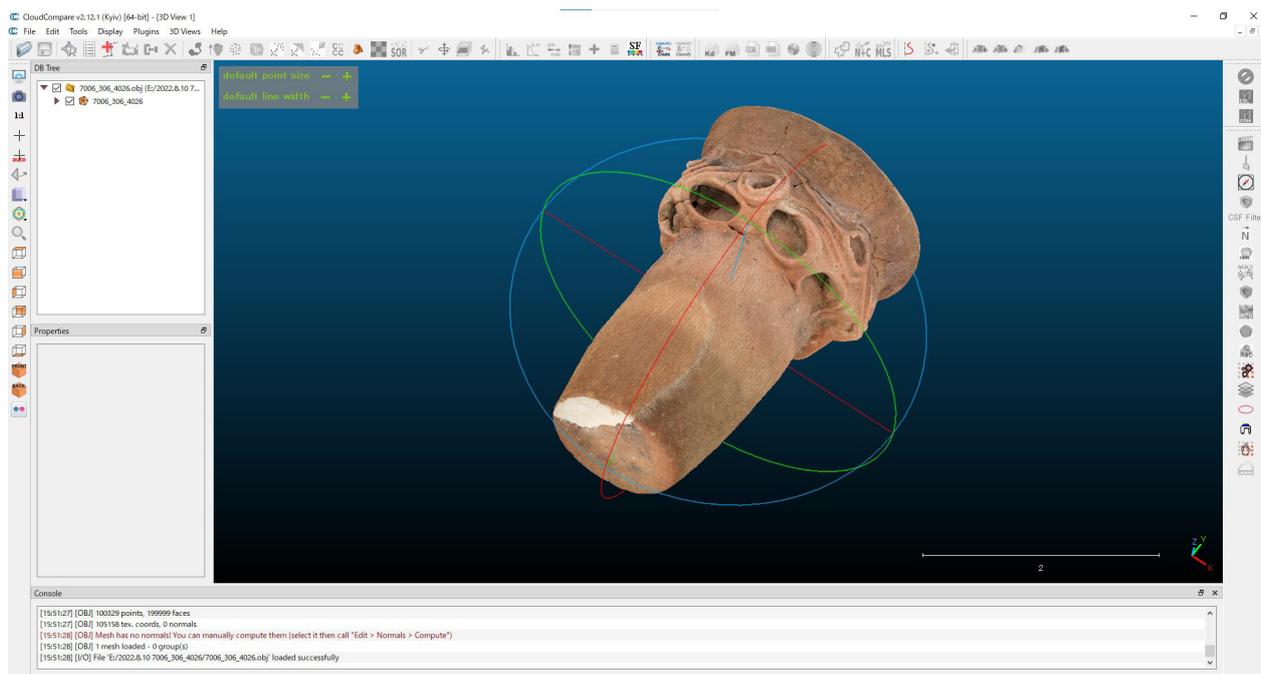
3Dデータを構築するだけでは、公開・活用が図れません。群馬県では構築したデータをWebサイト「Sketchfab（スケッチファブ）」で公開することになりました。そこで、ネット上でも閲覧できるように点

を間引いてデータ量を軽くし、よりよいテクスチャ画像を張り付けて掲載できるようにしました。また、海外からアクセスされることも考慮し、英語での解説も併せて掲載する予定です。

## 6 3Dデータのこれから

現在、様々なところで3Dデータを活用した文化財の取り組みが増えてきています。県内でも、群馬県立歴史博物館では3Dモデル化した埴輪を観察できるコーナーを設けています。また、金井遺跡群（渋川市）は現地でVRによって再現された古墳時代のムラの様子を見ることができます。遺跡の保護にも3Dが活躍しています。熊本県では熊本地震の直前に装飾古墳の3Dデータを取得していたため、古墳がどのような被害を受けたのかが確認できました。また、城の石垣の修復では、石垣の勾配の3Dデータによって、修理の基礎データができた事例もあります。これからも、3Dデータの利用はますます増えていくことが予想されます。そして、国内はもちろん、海外の文化財も私たちの身近になっていくことでしょう。

しかし、まだまだ本物の文化財や遺跡の持つ空気感には勝てません。ぜひ、3Dモデルを見て興味を持った時には、現地や本物の資料を自分の目や足で体感し、文化財の魅力を感じていただければと思います。



(写真5) 3Dモデルの完成

# 鉄と馬が共存する古代社会の鉄器生産

村上 恭通 先生

—モンゴル・グング遺跡と群馬・金井下新田遺跡を中心に—

- (1) 開催日 令和5年2月4日(木)
- (2) 講師 村上恭通(むらかみ やすゆき)先生  
愛媛大学大学院人文社会科学研究科教授、同大学社会共創学部教授、同大学アジア古代産業考古学研究センター長
- (3) 会場 前橋テルサ・ホール

## 講演内容

村上先生は、ユーラシア大陸の東西に連なるアイアンロードとその歴史的展開について考察と発信を続けておられる、古代の製鉄を中心とした産業考古学研究の第一人者です。先生は、紀元前後の遊牧騎馬民族国家の匈奴から5世紀の柔然に至る、500年に及ぶ製鉄遺跡であるモンゴル西部のグング遺跡等で長年にわたり発掘調査を続けられ、そこでの調査の様子も映示しながら、ユーラシア大陸の鉄生産の歴史と技術の伝播、古墳時代半ばの群馬の地の鉄器生産とその意義について、具体的事例とともに解説されました。

### 鉄器生産の開始と東アジアへの伝播

紀元前18世紀に現在のトルコ付近にあったヒッタイト帝国で世界史上最初に鉄器が実用化された後、紀元前7世紀以降黒海沿岸に発した史上最初の遊牧騎馬民族国家スキタイ王国で鉄生産が本格化します。スキタイ時代、馬の口にかませて手綱と結びつけ馬を制御する基本的な馬具の「銜」(はみ) (くつわ) が青銅製から鉄製に置き換わり、格段に実用性が増しました。そして騎馬の風習は製鉄技術を伴いモンゴル高原に伝播し、紀元前3世紀以降遊牧騎馬民族国家の匈奴に引き継がれ、東アジアへ橋渡しされました。先生が調査するグング遺跡は、まさにこの時代の遊牧騎馬民族と鉄との密接な関係を物語る遺跡です。

### 騎馬民族国家の製鉄と交易

モンゴル高原といえば広大な草原地帯のイメージが一般的ですが、グング遺跡の立地するアルタイ山脈は、今以上に森林地帯が広がっていたといえます。豊富な木材資源を伴う鉍石の産出地こそが製鉄の適地です。広大な平原を渡り、山中に分け入り、製鉄適地の探査、そして木材や鉍石類の運搬には、馬が必須でした。グング遺跡では製鉄拠点が多数分散し、時と場所

を違って製鉄が行われ、森林資源の枯渇を回避する回遊的製鉄が行われました。馬を駆使した運搬・機動力が原料と燃料の獲得に適しており、鉄生産を営み交易をおこな



(写真1) 村上先生

う匈奴の姿が明らかになりました。農耕社会への略奪という従来の遊牧騎馬民族国家への評価を、先生は現場感をもって覆されました。

### 金井下新田遺跡の世界史的意義

東アジアの鉄器生産に関する大きな課題が、鍛冶に関する情報の欠如でした。そうした中で「馬がたたく集落のなかで鍛冶屋が鉄器造りにいそしむ風景」が復元できる遺跡こそが、「金井下新田遺跡の鍛冶工房跡」である、と評価されました。榛名山の火山噴出物に覆われたため、工房内の区画や用具の配置や鍛造剥片など、工房の空閑利用の具体的状況が判明した重要な遺構であり、まさに「紀元79年のヴェスヴィオ火山の大噴火で埋もれたイタリアのポンペイの鍛冶の家や鷹匠の家といった鍛冶遺構に匹敵する情報と魅力を有している」と結ばれ、熱気あふれる講演を終えられました。金井下新田遺跡の世界史的意義をも再認識することができた講演でした。

飯塚 聡



(写真2) 講演の様子

## 発表要旨

令和4年7月10日(日)に発掘情報館で開催した「ぐんま遺跡報告会」には、多くの方にご参加いただきました。また、発表と併せて実際の出土遺物をご覧いただいたことで、より遺跡を身近に感じられる報告会となりました。以下は各遺跡の報告の概要です。



### 1. 西上之宮遺跡 (伊勢崎市)

報告者 多田宏太

西上之宮遺跡は、一級河川利根川の改修工事に伴い発掘調査が行われ、縄文時代から中近世の遺構・遺物が発見されました。中でも、利根川の洪水砂層の下からまとまって発見された中世の五輪塔・宝篋印塔(いずれも供養塔やお墓に使われる塔の一種)・板碑(石製の供養塔)の出土状況は極めて良く、骨を納めた骨壺や古銭が出土していることから墓地と考えられます。これらの石造物の中には梵字や「徳治三年(1308)」「文明八年(1476)」などの年号が刻まれたものがあり、この墓地の年代を知る手掛かりになりました。

調査地点は南北朝時代に玉村御厨と呼ばれた伊勢神宮領荘園の一部であったと言われる地域であり、玉村の歴史や玉村御厨について考える上で重要な発掘成果と言えます。



発見された中世の石造物

### 2. 多田山東遺跡 (伊勢崎市)

報告者 木村 収

多田山東遺跡は、国道50号バイパス(前橋笠懸道路)建設に伴い発掘調査が行われ、溝とそれに伴う柱穴列によって区画された古墳時代の方形区画が発見されました。東辺約62mで、他は調査区外のため、全容は不明です。区画の内側に沿って約3mの間隔で発見された柱穴列は、柵と考えられます。区画内からは区画の辺に沿うように2棟の掘立柱建物跡が発見されました。1棟は東辺のほぼ中央に平行に配置された約4m×17mの細長い建物跡で、もう1棟は南辺に沿うように配置された約4×5mの建物跡です。

これらの遺構は出土した土器などから6～7世紀に機能し、また、一般的な掘立柱建物とは異なるものと考えられます。今後の整理では多田山丘陵の古墳群や周辺遺跡と関連付けて方形区画を位置づける必要があります。



方形区画と掘立柱建物

### 3. 後賀中割遺跡 (富岡市)

報告者 川口 亮

後賀中割遺跡は、一般県道197号線の拡幅に伴い発掘調査が行われ、縄文・弥生時代の竪穴建物や古墳時代の方形周溝墓4基・古墳7基などが発見されました。6基の古墳は7～8世紀の群集墳で、1基は5世紀のもので、富岡市内 簗川周辺では5世紀代の古墳は少なく、貴重な発見となりました。また、7～8世紀のものと考えられる8号墳からは、馬具や小札甲などの金属製品が多く発見され、中でも5点の渦巻文杏葉は東日本2例目となる非常に貴重な遺物となりました。

これらの遺物から、埋葬された人物は渡来系集団との関連も想定され、広域交流に携わる人物であった可能性も考えられます。



渦巻文杏葉

### 4. 万木沢B遺跡 (東吾妻町)

報告者 谷藤保彦

万木沢B遺跡は、上信自動車道吾妻西バイパス建設に伴い発掘調査が行われ、縄文時代から古代、中・近世までの遺構が発見されました。中でも、県内では調査事例の少ない縄文時代の終わりから弥生時代の初めごろの遺構や遺物が研究者の注目を集めています。

これまで県内で調査された再葬墓(弥生時代の墓)より古い墓制形態の遺構や、この時期の土偶の発見は県内では珍しく、中実土偶(中身が詰まった土偶)と中空土偶(中身が空洞の土偶)のほか、顔面の表現がある鯨面土偶(顔に刺青が施されたもの)や鯨面付き土器も目を惹きます。また、隣接する唐堀遺跡(縄文時代)に続く時期の遺跡であることから、唐堀遺跡から集落が移動した可能性もあります。



中実土偶

本田寛之

# 掲示板



## 普及課からのお知らせ

創立45周年を記念して、収蔵展示室の展示物をリニューアル中です。

これまでの発掘成果を反映した展示にぜひご期待ください。



電子メールにより行事案内をお知らせしています。

■年間を通じて展示会や講演会などを催しています。

電子メールによるこれらの案内を希望される方は、下記のアドレスより申込みをしてください。

なお、受付時の事務処理上、事業団へ送信していただく電子メールのタイトルは「行事案内希望」とし、郵便番号、住所、氏名、連絡先電話番号を記入してください。



■電子メール送付先

gunmaifukyu @ apricot.ocn.ne.jp



※携帯電話アドレスへの連絡を希望される方は、パソコンからのメールが受信できるように携帯電話の設定をしてください。

■事業団のホームページ

<http://www.gunmaibun.org/>

連絡先：普及課

☎ 0279-52-2513



### 表紙解説

3Dモデルをオンラインで公開しているWebサイト「Sketchfab（スケッチファブ）」。サイト内の検索バナー「Search 3D models」に「群馬県埋蔵文化財調査センター」と入力すると、「3Dモデル化した遺物」を無料で御覧になれます。内容は随時更新される予定ですので、今後公開される遺物にご期待ください。ぜひこの二次元コードを読み取り、パソコンやスマートフォンの画面を通じて群馬県で出土した縄文土器をじっくり観察してみてください。



本誌は、一般向けの埋蔵文化財情報誌です。  
当事業団ホームページ（<http://www.gunmaibun.org/>）からPDFをダウンロードしていただけるようになりました。  
お問い合わせは、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団普及課 電話 0279-52-2513 までお願いします。

「埋文群馬」No.68  
令和5年7月19日発行  
発行 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
〒377-8555 渋川市北橘町下箱田784-2  
電話 0279-52-2513